第二章

基本的な理論

2.1　日本語の動詞

影山（2001）は「動詞は文を作るときの要となる重要な要素である、近年、欧米では英語動詞の意味的性質の解明が目覚ましい勢いで進んでいる。井下田（Putri,2006）は「動詞は人やもの動作、作田お表す語です」と定義している。

しかし、中沢（Putri、2006）「動詞とは自立語で活用がなり、単独で述語になることができ、ウ段で言いきるものを言います」と定義している。

2.2　あがるとのぼるの使用

2.2.1　あがるの使用

Effective Japanese Usage Dictionary (2005) は、あがるの意味による分類には三つに分けられている。

a.低い所から高い所へ移動することである。

(1)エレベータで屋上にあがる。

(2)階段をあがってすぐ右のドアが、私のうちです。

(3)彼はステージにあがって話し始めた。

(4)「質問はありませんか」と議長が聞くと、ぱっと数人の手があがった。

(5)夜空に鮮やかな花火が、つぎつぎとあがった。

(6)大使館の庭に国旗があがっている。

(7)デパートの屋上に、アドバルーンがあがっている

b.成績　．評判　．　値段など、ものごとの価値や程度が高くなることである。

(8)かれはこのごろ急に成績があがって。

(9)物価はあがるのに給料はあがらないので生活が大変です。

(10)　やせようと思って運動を始めたけれど、なかなか効果があがらな　い。

c.また、「終わる、完了する」の意味で、〔出る〕の意味で、「館長してふだんの落ち着きがなくなる」の意味でのようにも使う。

(11)　雨があがってきれあいな虹がかかった。

(12)　おふろからあがったら冷たいビールが飲みたい。

(13)　私は始めた舞台に立ったとき、あがってしまいセリフを忘れた。

2.2.2　のぼるの使用

日本語の動詞用法辞典 (2004) は、のぼるの意味による分類には四つに分かれている。

a.　移動してたかいところに達する。

(14)　猿が木にのぼる。

b.　高い地位に達する。

(15)　その男は大臣の位にのぼった。

c.　話題に取り上げられる。

(16)　あなたのことがうわさにのぼった。

d.食べ物が食卓に出させる。

(17)　魚が食卓ののぼる。

Effective　Japanese　Usage Dictionary (2005) は、のぼるの意味による分類には四つ分けられている。

a.　低い所から高い所に移動するこですが、
高い所を目座して徐々に移動していく過程に重点がある。

(18)　今度の休みに山ののぼるのが楽しみだ。

(19)　子供のころ、よくこの木にのぼった。

(20)　私は健康のために、エレベーターを使わずに階段をのぼることにしている。

(21)　鮭は産卵の時期になると、産まれた川をのぼってくる。

(22)　朝日がのぼると、一日が始める。

b.「のぼっている」は現在進行や、続いている動作、状態を表す。

(23) 煙突の煙がまっすぐ上にのぼっている。

c.「話題になる」の意味でようにも使う。

(24)　　このごろ彼の離婚がさかんに人々の話題にのぼっている。

d.「食事として出る」の意のようにも使

う。

(25)　最近、海外からの珍しい食べ物が食卓にのぼるようになった。

2.3　言葉の誤用分析

言語の誤用分析は研究者と教師にサンプルを集め、サンプルの誤用を誤用評価されるという方法えある。言語のシステムの違反はあるが、言語誤用も起こる。そのいはんは第一言語を学習するに対して、学習者の能力の刻当するのがある。すなわち、習得と学習である。Nurhadi（1995） は「学習は正式と明白な言語が学習されるのを能力する認識的努力である。その反対は習得でる。第二言語能力は第一言語の範囲におけり学習のとおりが持ちたれる。特別な定義をもつことでも、言語誤用は学習と言語習得の起こってしまうことがある。従って、言語習誤と言語誤用はたかま関があり。特に第二言語習得である。

第二言語の能力の過程では習得する言語前が影響することができる。Dulay は「学習者が知識しているかどうかを別にして、第二言語を勉強する

時に、第一言語から語彙」と述べている。構造などが起こっている。その移転は誤り *error* および間違い *mistake* および学習者によって、新言語を作る言語という *interlanguage* である。

2.4 *Error* と *Mistake*

Error は能力要素で原因である。すなわち、言語の規則の知識が減られて。また、第二言語のシステムについて学習者の知識は拡大されるから、システム的の違反がある。Tarigan (1988) は「訂正するがなく、その誤りは長い間で起こる (p.143) 」と述べている。*Error* は学習するげんごシステムに対して、学習者の理解描写である。理解が拡大になると誤りが減ることになる。

Mistake は運用の要素で原因である。起こった違反が疲れや、くたびれや、注意がないなどという運用が原因となる。コンセントレーションをもっと考えるときに、学習者自分で訂正するこができ、短い時間がかかり。Tarigan (1988) は「誤用分析の起点として *error* は適当である (p.78) 」と述べている。

2.5 誤用分析の目的は言葉

誤用分析の目的は言語の教え訂正の起点として、使用することができ、

フィードバックを探す。それは学習者を作る誤用が防止され、減らす。たからさの有益は言語を教える教材のとして。反復練習、試験のとして、入れる。Nurhadi (1995) は「理論的の有益は言語の教える方法を支えるために言語誤用分析をする (p.235)と言われている。